

14 アーネスト・ヘミングウェイ

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) は、産科医の父親クラレンスと音楽指導者だった母親グレースの間に長男として誕生し、姉と三人の弟、妹と共に育った。一家は家系図的に古い歴史を誇っている。父方の祖先は1634年にアメリカへ移住した清教徒たちの一人であり、母親の家系は1731年まで遡ることができる。ヘミングウェイが生まれ育ったシカゴ郊外の町**オークパーク (Oak Park)** は、徹底した禁酒の町であり、敬虔なプロテスタントが大半を占めていた。幼少時から彼は釣りや狩猟に親しむ一方で、教会の聖歌隊に所属していた時期もあった。

ヘミングウェイ家はミシガン州ワルーン湖畔に土地と別荘を所有し、ヘミングウェイは18歳になるまでの大半の夏を当地で過ごしていた。近隣には先住民の集落が残存し、父はオジブウェイ族の往診に出かけてもいた。高校進学後のヘミングウェイは、ハイキング部、陸上部、ライト級フットボール部、オーケストラ部に所属したほか、新聞部で『トラピーズ』の執筆、編集に携わった。また彼が文芸雑誌『タビュラ』に投稿した小品には、文才の片鱗を見出すことができる。卒業後はキャンザス・シティ・スター社の見習い記者となったが、スター社の文体心得はヘミングウェイの文体形成に大きく影響を及ぼすことになる。その後彼は、アメリカ赤十字傷病兵運搬隊に志願し、第四分隊に所属する。そして赤十字移動酒保サービスの任務に就いてすぐ、オーストリア軍の迫撃砲弾が至近距離で炸裂し、ヘミングウェイは両脚に重傷を負った。ミラノの赤十字病院に入院後、彼は売春宿、タバコ、アルコールや看護婦アグネスとの恋愛を経験した。

アメリカへの帰国後、ヘミングウェイは『トロント・スター・ウイークリー』紙に記事を寄稿する仕事に就くが、文学を志して最初の妻ハドリーとともにフランスへ渡る。そしてスター社の移動特派員として生計を立てる傍ら、モダニズム前衛芸術最先端の地であったパリで文学修行に励む。また1923年6月にマドリードで初めて闘牛を観戦して以来、ヘミングウェイは闘牛に心酔し、それは彼の文学テーマの一つとなった。その後2番目の妻ポーリーンとの結婚に際して、彼はカトリックに改宗し、**キー・ウエスト (Key West)** に移り住んでいる。そして初の自宅を所有し、友人たちと流し釣りに興じた。一方で28年12月に、クラレンスはヘミングウェイの祖父アンソンが愛用していた拳銃を用いて自殺した。

当時、男性向け雑誌『エスクァイア』に記事や写真が掲載されると、読者の間にはヘミングウェイの並外れた男らしさやスポーツマンとしてのイメージが根付き始める。33年12月から翌年2月にかけて、彼は幼少時以来の念願だったアフ

リカでのサファリを行っている。また36年7月にスペイン市民戦争が勃発すると、ヘミングウェイは周囲の反対を押し切って、北米新聞連盟と記事執筆の契約を結びスペインに向かった。さらに彼はスペイン市民戦争の記録映画『スペインの大地』(The Spanish Earth, 1937) の製作に携わっている。その後39年4月、彼はマーサが借りたハバナ郊外の古い屋敷に移住した。その翌年にポーリーンとの離婚が成立するものの、ヘミングウェイは妻子遺棄罪で二人の息子を養う権利を失っている。

1941年2月にヘミングウェイは『PM』紙の極東特派員として中国に向かい、新たな妻マーサと共に日中戦争を取材した。また重慶で蒋介石と会見している。彼が書いた記事は国民党軍の詳細な報告のみならず、太平洋戦争勃発を予測したものだった。キューバに戻ると愛艇ピラール号を改造し、ドイツ潜水艦の偵察活動を行ったほか、『コリアーズ』誌の従軍記者として英国空軍に同行している。その後『ライフ』誌の報道記者メアリーと出会う。1944年には連合軍のノルマンディ上陸作戦を輸送船から目の当たりにしたほか、第二十二連隊と行動を共にした。

1945年11月に執筆した『自由世界のための名作編』(Treasury for the Free World) の「序文」において、ヘミングウェイは広島に投下された原爆に触れ、「いかなる兵器も道徳的問題を解決した例はなかったと心に留めておくべきだ。兵器は解決を強いるものだが、それが正当な解決策だと請け負うことはできない」(xiv)と自らの戦争観を吐露している。同年12月にマーサと離婚した彼は、48年に妻メアリーとフォッサルタを再訪し、第一次世界大戦中に重傷を負った地点で1万リラ紙幣を埋めた。また北イタリア滞在中に18歳のアドリアーナと出会い心を奪われている。1953年から54年にかけて、彼は二度目のアフリカ・サファリ旅行に出かけている。しかしベルギー領コンゴへ遊覧飛行に向かった際、二度の墜落事故に遭い、その後生涯を通じてこの事故の後遺症に苦しむことになった。

1954年にヘミングウェイは、ノーベル文学賞 (Nobel Prize in Literature) を受賞する。そしてメダルをキューバのコブレにある聖母マリアの寺院に献じた。また59年に彼がスペインに滞在中、19歳のヴァレリーに出会うが、これ以降彼女はヘミングウェイの秘書を勤めている。その翌年に彼は再びスペインに向かうものの、強度の神経衰弱、不眠症と極度の被害妄想のため、帰国後セント・メアリー病院に入院した。一時は快方に向かうものの、電気ショック療法の副作用により、失語症や記憶力の衰えなど、作家としては絶望的な閉塞状況に追い込まれている。こうして自殺願望に憑依されたヘミングウェイは、1961年7月2日の朝、ケッチャムの自宅において猟銃で頭部を撃って、61年の生涯を閉じた。

(本荘 忠大)